

「食べてはいけない」(旧約) から 「取って食べなさい」(新約) へ

柊 暁生

I. プロローグ

イエスは弟子たちと最後の食事をした時、「取って食べなさい。これは私の体である」¹ (マタイ 26:26) と言ってパンを与える。キリスト教のミサ聖祭、聖餐式の原型は主の晩餐にあり²、それはイスラエルの民がエジプトから脱出した時の過越祭にもとづく³。過越祭と主の晩餐は、一方は旧約聖書における、他方は新約聖書における重要な祭儀的食事である。聖書の中心にはある意味で食べることがあると言える。食べることは生きることに密接に関連するからである。

聖書の中で最初に食べることが述べられているのは、天地創造の6日目の記事においてである。「見よ、全地に生える、種を持つ草と種を持つ実をつける木を、すべてあなたたちに与えよう。それがあなたたちの食べ物となる」(創1:29) 草と木という植物が人間の食物となることが言われている。さらに続く節では、人間だけではなく動物の食物についても言及されている。「地の獣、空の鳥、地を這うものなど、すべて命ある

¹ 本稿での聖書の引用は基本的には『新共同訳聖書』による。

² 「主の晩餐」(*κυριακὸν δεῖπνον*) という表現は1コリ 11:20 においてだけあらわれる。パウロは1コリ 10:21 において「主の杯」(*ποτήριον κυρίου*)、「主の食卓」(*τράπεζα κυρίου*) とも言う。ルカは使徒言行録の中で「パンを裂くこと」(*κλάω + ἄρτον*. 2:42, 46. 20:7 ほか) と記す。主の晩餐に関係する記事は共観福音書、及び1コリント書に記されているが、ヨハネ福音書においては直接には書かれていない。ヨハネ6章のパンの記事が間接的に関係する。

³ 「過越の食事をする」(*φαγεῖν τὸ πάσχα*) という表現はマタイ 26:17, マルコ 14:12, ルカ 22:8, 11, 15, ヨハネ 18:28 にあらわれる。ヨハネ福音書では「食事」(*δειπνον*. 13:2, 4. ほか) に 21:20) と言われている。

ものにはあらゆる青草を食べさせよう」(創1:30) 動物には草が与えられている。

だが、創世記第2章～3章では食べることに關して、ある禁止が言われる。エデンの園で、神は人間に園のどの木からも食べてもよいが、善悪の知識の木からは食べてはいけない、食べると必ず死ぬと禁じられる(創2:16～17)。この神の言葉にもかかわらず、女と人とは神が命じられた禁止の言葉を破り、木の実を食べてしまう。その結果、人間に苦しみと死が入り込むことになる。

時は満ち、新約の時代、第二のアダム⁴であるイエスは弟子たちと最後の食事をした時に、「取って食べなさい」と言ってパンを食べることをすすめる。そのパンは自分の体のことであり、食べることが生きることにつながるというのである。

エデンの園において、「食べてはいけない」との禁止が破られ、人間に死が入って来た。そこでは禁止された木の実を実際に「取って食べる」ということが述べられている。「女は実を取って食べ、一緒にいた男にも渡した(=与えた)ので、彼も食べた」(創3:6) また、アダムとエヴァをエデンの園から追放する前に神は言われる。「手を伸ばして命の木からも取って食べ、永遠に生きる者となるおそれがある」(創3:22)

主の晩餐の記事は、基本的には過越祭の食事に基づく伝承であるが、イエスの「取って食べなさい」という言葉は、エデンの園で神が言われた「食べてはいけない」(創2:17)、女が「取って食べた」(創3:6)という記述に対立するものとして書かれたのではないかと考えられる。言ってみれば、聖書のはじめには、食べることの禁止が破られて人間に死が入ってきたと述べられているが、それに対して聖書のおわりでは食べることの奨励があり、食べることによって人が生きると主張されているのである。

本稿では、新約聖書の「取って食べなさい」(マタイ26:26)が旧約聖書の「取って食べた」(創3:6)という箇所に関連すると考え、動詞「取る」と「食べる」に焦点を絞って、主の晩餐の記事から原初史の物語に

⁴ ロマ5:14は「実にアダムは、来るべき方を前もって表す者」(τύπος)と言い、1コリ15:45は「最後のアダム」(ὁ ἔσχατος Ἀδάμ)と言う。

さかのぼって聖書の食べることの意味を考察してみたい。

II. 主の晩餐（新約聖書）

(1) 主の晩餐の記事：マタイ，マルコ，ルカ，パウロ

イエスは十字架に架けられる前の晩，12人の弟子たちと一緒に過越祭の食事（マタイ 26：17）をおこなう。パウロが主の晩餐（1コリ 11：20）と述べる食事であり，一般には最後の晩餐という呼称で世に知られている⁵。この食事に関しては，マタイ，マルコ，ルカによる共観福音書，およびパウロのコリントの信徒への手紙一に記述がある。

もちろん，これらの記事を比較してみると，それぞれ細部にわたって相違する点は多々あるが，大きく見ればマルコ型とパウロ型の二つの伝承に分かれると考えられている⁶。マルコ型はマタイ 26章 26～30節とマルコ 14章 22～26節，パウロ型はルカ 22章 14～20節と1コリント 11章 23～25節である。マタイとマルコには，たとえば「賛美の祈り」，「契約の血」など共通する単語があるが，ルカとパウロではそれらが「感謝の祈り」⁷，「新しい契約」などという異なった表現になっている。

主の晩餐に関するこれらの記述の違いは，もともとイエスを記念する食事の祭儀伝承の差異によるものと考えられる。

⁵ アガペー（ἀγάπη = 愛餐。ユダ 12，クレメンス，ヒッポリトスなど），エウカリスティア（εὐχαριστία = 感謝。イグナティオ，ユスティノスなど），コイノニア（κοινωνία = 交わり。1コリ 10：16）などとも呼ばれる。

⁶ J・エレミアス著，田辺明子訳「イエスの聖餐のことば」（日本基督教団出版局 1974）等参照。

⁷ マタイ，マルコにも「感謝の祈り」はあるが，それは杯と関係し，パンとではない。

(2) マルコ型伝承：マタイ 26 章 (Mt26) とマルコ 14 章 (Mc14)

(i) マタイとマルコの本文

	食事をする	取る	イエス	パン
(Mt26: 26)	'Εσθιόντων δὲ αὐτῶν λαβῶν ὁ Ἰησοῦς ἄρτον καὶ			
(Mc14: 22)	Καὶ ἐσθιόντων αὐτῶν λαβῶν ἄρτον			
	賛美の祈りをする	裂く	与える	弟子たちに
(Mt26: 26)	εὐλογήσας	ἔκλασεν	καὶ	δούς τοῖς μαθηταῖς
(Mc14: 22)	εὐλογήσας	ἔκλασεν	καὶ	ἔδωκεν αὐτοῖς
	取る	食べる	これは	である 体 私の
(Mt26: 26)	Λάβετε φάγετε, τοῦτό ἐστίν τὸ σῶμά μου.			
(Mc14: 22)	Λάβετε, τοῦτό ἐστίν τὸ σῶμά μου.			
	取る	杯	感謝の祈りをする	与える
(Mt26: 27)	καὶ λαβῶν ποτήριον καὶ εὐχαριστήσας			ἔδωκεν
(Mc14: 23)	καὶ λαβῶν ποτήριον	εὐχαριστήσας		ἔδωκεν

(ii) 共通の定式

マタイとマルコによる主の晩餐の箇所を比較すると、基本的には以下のように共通する一定のパターンが見られる。両者の主の晩餐の記事は大きく二部に分かれ、前半はパン、後半は杯に関するものである。さらに、それぞれの前半がイエスの行為、後半がイエスの言葉となっている。

I. パン

- A [行為] 食事をする→パンを取る→感謝する→裂く→与える
 B [言葉] →言う→取れ→(食べよ)→これはわたしの体である

II. 杯

- A [行為] 杯を取る→感謝する→彼らに与える
 B [言葉] 皆、これから飲め→これはわたしの契約の血である。

(iii) 動詞「取る」（第2アオリスト）

「取る」（*λαμβάνω*）という動詞に着目してマタイとマルコを比較してみると、以下のようなことが明らかになる⁸。

イエスの行為 イエスの言葉

Mt26: パン = *λαβών* (分詞形) + *λάβετε* (命令形) *φάγετε* (命令形)

Mc14: パン = *λαβών* (分詞形) + *λάβετε* (命令形)

イエスの行為 イエスの言葉

Mt26: 杯 = *λαβών* (分詞形) なし

Mc14: 杯 = *λαβών* (分詞形) なし

まず第一に、パンの場合においても杯の場合においても、動詞「取る」は、イエスの行為の記述において使われている。イエスがパンを取る、杯を取ると言われ、両者ともに分詞形である。しかしながら、杯の場合には、動詞「取る」は、イエスの言葉の記述においてはマタイ、マルコともに用いられていない。イエスの言葉として、パンの場合には、「取りなさい」（「取る」の命令形）と言われているが、杯の場合には、単に「飲みなさい」（マタイ）、「（彼らは皆）飲んだ」（マルコ）とのみ記されており、杯を「取りなさい」とは述べられていない⁹。また、パンに関するイエスの言葉の記述において、「取る」の命令形「取りなさい」はマタイにもマルコにもあるが、マタイの場合にはそれに続いて「食べなさい」（*φάγετε*）という動詞「食べる」の命令形が付加されている。マルコの場合には「食べなさい」という命令形はない。「取って食べなさい」とマタイが書くのは、イエスの言葉はまさに創世記3章6節の「取って食べた」に対峙するものとしてあることを示そうとしたからではないであろうか。

⁸ *λαμβάνω* については *TDNT* vol.IV pp.5~15 参照。ルカ 24:30, ヨハネ 21:13 にも「パンを取る」（*λαμβάνω* + *τὸν ἄρτον*）という表現はある。

⁹ ルカのみが杯に関して「これを取りなさい」と記す（ルカ 22:17）。

(3) パウロ型伝承：ルカ 22 章 (Lc22) と 1 コリント 11 章 (1 Cor11)

(i) ルカ (A) とパウロ (B) の本文

取り上げる 杯 感謝の祈り 言う 取る
 (Lc22: 17) *καὶ δεξάμενος ποτήριον εὐχαριστήσας εἶπεν Λάβετε*
 (1Co11) 対応箇所はない

取る パン 感謝の祈りをする 裂く 与える
 (Lc22: 19) *καὶ λαβὼν ἄρτον εὐχαριστήσας ἔκλασεν καὶ ἔδωκεν αὐτοῖς*
 (1Co11: 23) *ἔλαβεν ἄρτον καὶ εὐχαριστήσας ἔκλασεν καὶ*

言う これはである 体 あなたがたのために
 (Lc22: 19) *λέγων, Τοῦτό ἐστὶν τὸ σῶμά μου τὸ ὑπὲρ ὑμῶν*
 (1Co11: 24) *εἶπεν, Τοῦτό μου ἐστὶν τὸ σῶμα τὸ ὑπὲρ ὑμῶν*

杯 同じように 食事のあとに 言う
 (Lc22: 20) *καὶ τὸ ποτήριον ὡσαύτως μετὰ τὸ δειπνήσαι, λέγων,*
 (1Co11: 25) *καὶ τὸ ποτήριον μετὰ τὸ δειπνήσαι λέγων,*

この 杯 新しい契約 わたしの血
 (Lc22: 20) *Τοῦτο τὸ ποτήριον ἡ καινὴ διαθήκη ἐν τῷ αἵματι μου*
 (1Co11: 25) *Τοῦτο τὸ ποτήριον ἡ καινὴ διαθήκη ἐστὶν ἐν τῷ ἐμῷ αἵματι*

(ii) 共通の定式

ルカとパウロによる主の晩餐の箇所を比較すると、基本的には以下のように共通する一定のパターンが見られる。

I. パン

A [行為] パンを取る→感謝の祈りをする→裂く→(与える)

B [言葉] 言う→これは～わたしの体である

II. 杯

A [行為] 食事の後→杯も同じようにして（パウロは逆順序）

B [言葉] 言う→この杯は～わたしの血による新しい契約

ここでも主の晩餐はパンと杯の二部に大別され、それぞれの前半部分がイエスの行為、後半部分がイエスの言葉の記述となっている。しかしながら、ルカの場合にはパンの記事の前に、さらに杯についての記述が15節から18節にかけてある。これはいわゆる長写本とよばれるもので一般的にはこの写本が採られているが、この箇所を除く短写本もある¹⁰。長写本の場合、ルカ22章の場合には、杯—パン—杯という順序になり、1コリント11章の場合には、パン—杯という順序となり、両者は異なる。パウロでは、マタイとマルコに共通の定式、I. パン A [イエスの行為]—B [イエスの言葉]、II. 杯 A [イエスの行為]—B [イエスの言葉] の順であるが、ルカでは、過越の食事に関するはじめのイエスの言葉（22：15～16）を除けば、共通の定式の前にまた別の杯の記述があり、それは、A [イエスの行為]—B [イエスの言葉] の順に書かれている。

Lc22: 15, 16 過越 [言葉] 「～過越の食事～」

17 杯 A [行為] 杯を取り上げる+感謝の祈りをする

17, 18 B [言葉] 「これを取り、互いに回して飲みなさい。～」

①ルカの長写本の問題（22章17-20節）

ルカの場合、15、16節の最初の言葉は言っているれば主の晩餐の導入の

同訳)と訳されている動詞は「受け取る」という意味の *δέχομαι* で、マタイやマルコが杯に関して用いている動詞「取る」(*λαμβάνω*)ではない。17節後半ではイエスは感謝の祈りを唱えてから、「これを取り、互いに回して飲みなさい。」(*Λάβετε τούτο και διαμερίσατε εις εαντούς*)と言う。この「取る」という動詞は、17節前半の「取り上げる」(*δέχομαι*)とは異なり *λαμβάνω* である。ただ、この「取る」(*λαμβάνω*)はマタイ、マルコでは杯に関してするイエスの行為の叙述として「杯を取り」と言われているが、イエスの言葉の中では用いられてはいない。また、命令形の「取りなさい」(*λάβετε*)はマタイ、マルコではパンに関して用いられており、杯に関してはこの動詞は使われていない。

さらに、ルカは「これを取りなさい」と17節前半では杯を代名詞で「これ」(*τούτο*)と記すが、17節～20節での指示代名詞 *τούτο* (「これ」あるいは「この」)の用法を見れば、「これを取りなさい」(17節)は「これを行ないなさい」(19節)に、「これは～わたしの体である」(19節)は「この杯は～」(20節)に対応しているということがわかる¹¹。

杯に関する共観福音書の異同

Mt26: 「杯を取り」	(行為)	<i>λαβών ποτήριον</i>
「皆、～飲みなさい」	(言葉)	<i>πιετε εξ αυτου παντες</i>
Mc14: 「杯を取り」	(行為)	<i>λαβών ποτήριον</i>
「皆、～飲んだ」	(行為)	<i>επιον εξ αυτου παντες</i>
Lc22: 「杯を取り上げ」	(行為)	<i>δεξάμενος ποτήριον</i>
「これを取り、～飲みなさい」	(言葉)	<i>λάβετε τούτο</i>

② 1コリント 11章の問題

1コリント 11章がルカ 22章と大きく異なるのは、11章 23節の「わたしがあなたがたに伝えたことは、わたし自身、主から受けたものです。

¹¹ ルカの長写本では4回、マタイ、マルコで指示代名詞 (*τούτο* 「これ」あるいは「この」)は「これはわたしの体である」、「これはわたしの血である」とそれぞれ2回ずつ使われているほか、マタイではさらに1回 (26:29) 用いられているのみである。パウロではパンに関して2回、杯に関して2回の合計4回である。

すなわち、主イエスは、「引き渡される夜」という箇所である。これはルカにはない記述で、パウロは主から「受けた」（*παραλαμβάνω*）こと、それをあなたがたに「伝える」（*παραδίδωμι*）と述べる。そして、イエスは「引き渡される」（*παραδίδωμι*）夜に「パンを取り、感謝の祈りを唱えて、裂き、『これは、あなたがたのためのわたしの体である』～」と言う。23節では接頭語 *παρά* との複合動詞が3回繰り返し用いられている。*παραδίδωμι* が、「伝える」と「引き渡す」という異なった意味で2回使われており、最初の「受けた」（*παραλαμβάνω*）は、「パンを取り」と同じ動詞の「取る」（*λαμβάνω*）に接頭語 *παρά* がついたものである。

パンに関するイエスの言葉、「わたしの記念としてこのように行いなさい」はルカとパウロに共通であり、その続きもほぼ同様であるが、1コリント 11章 25節の最後の言葉「～飲む度に、わたしの記念としてこのように行いなさい。～」という箇所はルカにはない。

(iii) 動詞「取る」（第2アオリスト）

Lc22: 17 「これを取りなさい」 *λάβετε*（命令形）

Lc22: 19 「パンを取り、」 *λαβών*（分詞形）

1Cor11: 23 「パンを取り、」 *ἔλαβεν*（3人称単数形）

ルカとパウロの動詞「取る」（*λαμβάνω*）を比較すれば、まず第一にイエスの行為の記述としての「パンを取る」は同じである。しかしながら、ルカがマタイ、マルコ同様に分詞形（*λαβών*）であるのに対し、1コリント 11は3人称単数形（*ἔλαβεν*）である。動詞「取る」の3人称単数形は主の晩餐の記事ではパウロにおいてだけ見られる。

ルカでは「パンを取る」記事の前の杯に関して、「これ（＝杯）を取りなさい」（22：17）とのイエスの言葉があるが、これはマタイとマルコ同様にパウロにもなく、ルカのみの特徴的なことである¹²。この動詞「取る」の命令形「取りなさい」はマタイとマルコではパンに関してのみ言われているのである。ここで最後に、動詞「取る」について比較検討する。

¹² マタイはイエスの言葉として「皆、この杯から飲みなさい」（26：27）と書き、マルコは弟子たちの行為として「彼らは皆その杯から飲んだ」（14：23）と記す。

(4) 主の晩餐の記事における動詞「取る」(λαμβάνω, 第2アオリスト)

(Mt)		λαβῶν 分詞形 (パン)
(Mc)		λαβῶν 分詞形 (パン)
(Lc)	λάβετε 命令形 (杯)	λαβῶν 分詞形 (パン)
(1Cor)		ἔλαβεν 3人称単数形 (パン)

(Mt)	+ λάβετε 命令形 (パン) + (φάγετε) λαβῶν 分詞形 (杯)
(Mc)	+ λάβετε 命令形 (パン) λαβῶν 分詞形 (杯)

(i) 主の晩餐の記事における動詞「取る」の頻度数は、パウロが1回、ルカが2回、マタイ、マルコがそれぞれ3回である。パウロが1回この動詞を使うのは、パンに関するイエスの行為の記述においてのみであり、主の晩餐の記事すべてに動詞「取る」が共通であるのは、パン取るイエスの行為の記述においてのみである。ルカの場合、動詞「取る」は2回であるが、1回はパンに関してのイエスの行為の記述においてであり、あとの1回は杯に関してのイエスの言葉の中においてである。こうしたことから、パンを取るイエスの行為のパウロの記述は、主の晩餐の他の記事の基底にあると考えられる。

(ii) パンに関して、動詞「取る」はイエスの行為の記述として、パウロにおいては3人称単数形(ἔλαβεν)、マタイ、マルコ、ルカにおいてはすべて同じ分詞形(λαβῶν)¹³である。パウロに対し、マタイ、マルコ、ルカが相違する点である。イエスの言葉の記述として、マタイとマルコにおいては命令形「取りなさい」が用いられている。そしてこの命令形のあとに、マタイでは「食べる」の命令形「食べなさい」(φάγετε)が記されている。すでに見たようにこれはマルコには欠落している。単純に「取りなさい」と言うのみである。ルカとパウロではイエスが述べる言葉の中に「(パンを)取りなさい」という発言そのものがない。それに相当するのは、「これ(Τοῦτό)はわたしの体である」に続く「これ(τούτο)

¹³ エマオへの道中における食事の席でも「イエスはパンを取り」(ルカ 24:30)と記されているが、これも分詞形である。

を行いなさい」というイエスの言葉である。ここでは動詞「行う」(ποιέω)の命令形「行いなさい」(ποιεῖτε)が使われている。

(iii) 杯に関して、動詞「取る」は合計3回使われている。「杯を取る」というイエスの行為の記述として、マタイとマルコがそれぞれ1回ずつ用いている。「杯を取りなさい」というイエスの言葉としてはルカ(長写本)のみが1回使っている。マタイとマルコにはイエスの言葉として杯を「取りなさい」という記述はない。ルカにはイエスの行為の記述として「杯を取る」(λαμβάνω)という動詞はないが、「取り上げる」(δέχομαι)という動詞が、「取る」(λαμβάνω)の代わりに使われている。δέχομαιは基本的には「受け取る」、「受け入れる」の意味で、その派生語 *δοχή* は「宴会」を意味する¹⁴。70人訳聖書で *δέχομαι* は種々のヘブライ語の訳語として使われているが、多くはヘブライ語 קָח (取る) の訳語である¹⁵。エレミヤ 25 章 28 節では קָחֶם מִיָּדְךָ = *δέξασθαι τὸ ποτήριον* 「彼らがあなただの手から杯を受け〜」とあり、ルカ 22 章 17 節同様に「杯」との関係で使われている。

(iv) イエスの行為の記述としての「杯を取る」という動詞は、マタイとマルコではパンの場合と同様に分詞形である。他方、ルカはイエスの言葉として「杯を取りなさい」という命令形を用いている。この「取りなさい」(命令形)は上述したように、マタイとマルコではパンに関するのみ言われているものである。ルカが「取りなさい」(命令形)というイエスの言葉をマタイとマルコとは異なり、杯に関しても用いているのは、杯を重視したからであると考えられる。それは杯に関する記述が、パン-杯の記述の前にさらにあることから憶測できることである。

(v) 「飲む」ことに関して、マタイはイエスの言葉として「飲みなさい」

¹⁴ ルカ 5:29 参照。ルカ 10:8 には「迎え入れられたら (*καὶ δέχονται ὑμᾶς*)、出される物を食べ」とある。創世記 21:8, 26:30 の「宴会」(*קָח* = 動詞「飲む」からの派生語)は70人訳で *δοχή* と訳されている。“Subst. of *δέχομαι* as used in the sense of “receiving as a guest”, and therefore having the sense of “meal” or “feast”, i.e., the meal linked with hospitality” *TDNT* vol.II p.54 参照。

¹⁵ 創世記 4:11 には「血を受け取る」(*קָחֶם מִיָּדְךָ* = *δέξασθαι τὸ αἷμα τοῦ ἀδελφοῦ σου*) とある。他に出 29:25, 士 13:23, エレ 25:28 参照。

(πίετε) と命令形で記すが、マルコは弟子たちの行為の記述として彼らが皆「飲んだ」(ἔπιον) と 3 人称複数形で書く。これに続く箇所は両者ともに「これ (τοῦτο) は契約のわたしの血である」と同じである。

(vi) 「取る」という動詞に焦点をあてて主の晩餐の記事を考えてみれば、「取る」という動詞をイエスが「パンを取る」という行為においてのみ用い、それもマタイ、マルコ、ルカのように分詞形ではなく、3 人称単数形で記しているマルコがおそらく一番古いかたちであろうと推測される。

パウロは杯に関しては動詞「取る」を用いないが、マタイ、マルコ、ルカは杯に結びつけて「取る」という動詞を使っている。これは、動詞「取る」が元来はパンとの関係でのみ使われていたと考えられるが、のちになって杯にも適用され、発展的に使用されたものと推測される。

さらに、マタイ、マルコ、ルカを比較してみれば、「取る」という動詞の頻度数から言えば、ルカがマタイ、マルコに比して少なく、用いられ方もパウロに類似しており、ルカの長写本ではパンと杯のバランスが崩され、杯に重点が置かれているということがわかる。

III. 原初史の食事 (旧約聖書)

(1) 創世記の祭司資料における「食べること」—— 草食から肉食へ ——

(i) 天地創造 (創世記 1 章 29～30 節)

創世記 1 章 29 節～30 節の記事は祭司資料であると言われているが、29 節では人間の食べることに關しての、30 節では動物の食べることに關しての記述がある。天地創造の第 6 日目に神は人間を自分の似姿として造り、「海の魚、空の鳥、地の上を這う生き物をすべて支配せよ」(1 章 28 節) と述べるが、その記事に続いて人間と動物の食物 (אֵכָלָה)¹⁶ のことが語られている。第 6 日目の話はこの食物の叙述でもって終わっている。

「神は言われた。『見よ、全地に生える、種を持つ草と種を持つ実をつ

¹⁶ 『新共同訳聖書』では אֵכָלָה が「食べ物」(1:29)、「食べさせよう」(1:30)、「食糧」(6:21) と統一されずに訳されているが、ここでは他の単語、מִאֲכָלָה 「食糧」などと区別するために אֵכָלָה をすべて便宜上「食物」と訳す。

ける木を、すべてあなたたちに与えよう。それがあなたたちの食べ物となる。地の獣、空の鳥、地を這うものなど、すべて命あるものにはあらゆる青草を食べさせよう」(創1：29～30)。

וַיֹּאמֶר אֱלֹהִים הִנֵּה נֹחַתִי לָכֶם אֶת־כָּל־עֵשֶׂב זֶרַע זֶרַע אֲשֶׁר עַל־פְּנֵי כָל־הָאָרֶץ

וְאֶת־כָּל־הָעֵץ אֲשֶׁר־בוּ פְרִיעֵץ זֶרַע זֶרַע לָכֶם יִהְיֶה לְאֹכְלָהּ׃

וְלִכְל־חַיַּת הָאָרֶץ וְלִכְל־עוֹף הַשָּׁמַיִם וְלִכְל רוֹמֵשׁ עַל־הָאָרֶץ

אֲשֶׁר־בוּ נֶפֶשׁ חַיָּה אֶת־כָּל־יֶרֶק עֵשֶׂב לְאֹכְלָהּ

食物(אֹכְלָה)は人間(29節)のみならず、命あるすべての動物(30節)に関しても言及され、29節と30節は並行記事である。主語は神であり、動詞は人間に対しては「与える」(נָתַן)と「なる」(יָהָ)であるが、動物に対しては動詞がなく名詞文となっている。人間には「あなたたちに」と2回言われ、動物に関しては「すべての地の獣に、すべての空の鳥に、すべての地を這うものに」と言われている¹⁷。

ここで言われている食物は、基本的には人間にとっても動物にとっても同じ植物である。ただし具体的には、人間と動物では異なる点がある。

人間に対しては、まず第一に「種を持つすべての草」(כָּל־עֵשֶׂב זֶרַע זֶרַע)と言われ、第二に「種を持つ実をつけるすべて木」(אֲשֶׁר־בוּ פְרִיעֵץ זֶרַע זֶרַע)と言われている。人間には草と木の二種の植物に言及されているが、動物には「すべての青草」(כָּל־יֶרֶק עֵשֶׂב)とのみしか挙げられていない。動物には非常に単純な記述の仕方ではか語られていない。これは人間に対する食物の第一の草の部分に対応するが、ただ一語、יֶרֶק(青い=緑)が動物に対しては付加されている。

人間：① אֶת־כָּל־עֵשֶׂב זֶרַע זֶרַע אֲשֶׁר עַל־פְּנֵי כָל־הָאָרֶץ

② וְאֶת־כָּל־הָעֵץ אֲשֶׁר־בוּ פְרִיעֵץ זֶרַע זֶרַע

動物：① אֶת־כָּל־יֶרֶק עֵשֶׂב

人間が食べる草と木、動物が食べる草は、29節でも30節でもヘブライ語で אֹכְלָה(食物)と言われている。この名詞は動詞「食べる」(אָכַל)に由来し、旧約聖書では18回用いられている。創世記ではこのほかに、6

¹⁷ エゼキエル書29章5節には「わたしは野の獣、空の鳥にお前を食物(אֹכְלָה)として与える(נָתַן)」とある。他に34：5, 8, 39：4参照。

章 21 節と 9 章 3 節で使われている¹⁸。ノアの洪水物語の中で、洪水前に箱舟の中に食料を積み込むという記事 (6:21) と、洪水の後に肉食が草食と同様に許されるという記事 (9:3) においてである。両者ともに創世記 1 章の天地創造の記事と同じ祭司資料である。

(ii) ノアの洪水 (創世記 6～9 章)

① 創世記 6 章 21 節

「更に、食べられる物はすべてあなたのところに集め、あなたと彼らの食糧としなさい」

וַאֲתָהּ קַח־לָךְ מִכָּל־מֵאֲכָל אֲשֶׁר יֹאכֵל וְאִסַּפְתָּ אֵלֶיךָ וְהָיָה לָךְ וּלְהֵם לְאֹכְלָהּ:

洪水の前に、神はノアに箱舟を造ること、妻子、嫁と共に箱舟に入ること、すべて命あるもの、鳥、家畜、地を這うものが箱舟に入らることを命じ、その最後に食物についてのことを語る。神はノアに「あなた」(אַתָּה) と呼びかけ、「取りなさい」(קַח) と命じられる。動詞「取る」(לָקַח) の命令形である。「あなた自身に」(לָךְ) 取りなさいと言われ、これに続く文章は前置詞「すべての～から」(מִכָּל)¹⁹ + 「食物」(מֵאֲכָל) + 「ところの」(אֲשֶׁר)²⁰ + 「食べられる (יֹאכֵל)」という順序になっている。

次に、それらあなたが取ったものを「あなた自身に」(אֵלֶיךָ) + 「あなたは集める」(וְאִסַּפְתָּ)と言われ、最後にそれらは「あなたに」(＝人間)、「彼らに」(＝動物)「食物と」(לְאֹכְלָהּ)「なる」(וְהָיָה)と述べられる。最後の文言は創世記 1 章 29～30 節と並行的である。

創世記 6 章 21 節： לְאֹכְלָהּ וּלְהֵם לָךְ וְהָיָה
「食物と」+「彼らに」+「あなたに」+「なる」

創世記 1 章 29 節： לְאֹכְלָהּ וְהָיָה לְכֶם
「食物と」+「なる」+「あなたがたに」

1 章 30 節： לְאֹכְלָהּ ～ לְכָל + לְכָל + לְכָל
「食物と」+「すべての～に」(3 回)

¹⁸ エゼキエル書では一番多く、10 回使われている。

¹⁹ この「すべての～から」(מִכָּל) は 2:16, 3:1 (ヤハウィスト) のエデンの園における「食べる」ことに関しても用いられている。

²⁰ この関係代名詞の用法は創世記 1 章 29, 30 節に似ている。

6章21節では「あなた」(単数形, ノア=人間)と「彼ら」(動物)と述べられているのに対し, 1章29節では「あなたがた」(複数形=人間), 続く30節では3回「すべての〜に」と, 三種の動物に言われている。また, 6章21節と1章29節には「なる」(הָיָה)という動詞が「食物」と結びついて, 「食物となる」と述べられているが, 1章30節は名詞文で, 上述したように動詞「なる」(הָיָה)は欠落している。

また, 6章21節には「食べる」(אָכַל)という動詞が1回, この動詞由来の名詞である「食糧」(מִאֲכָל)²¹と, 「食物」(אֲכִלָּה)がそれぞれ1回ずつ用いられていて, 食べるということが強調されている。動詞「食べる」(אָכַל)は創世記2章16節ではじめて聖書の中にあられるが, ニッフアル形(再帰形)は6章21節で初めて出てくる。名詞「食糧」(מִאֲכָל)は2章9節と3章6節に続いてここ6章21節に出て来る。「あなたは」(וְאַתָּה)で始まる6章21節の続きは以下のようになっている。

- a. קָח־לָךְ מִכָּל־מִאֲכָל אֲשֶׁר יֹאכַל = 取る + あなたに + すべての食糧
- b. וְאַסַּפְתָּ אֵלַיךְ = 集める + あなたに
- c. וְהָיָה לְךָ וּלְהֶם לְאֲכִלָּה = なる + あなたに, 彼らに + 食物

ところで, 創世記6章21節のこの食糧, 食物はまだ草食であって, 人間と動物が食べることが出来るのは草や木の植物である。洪水以前において肉食の話はまだ語られていない。肉食が許されるのは洪水以後のことで, 創世記9章3～4節にその記述がある。それは草食に関する記事と同じく祭司資料に属するものである。

② 創世記9章3～4節

「動いている命あるものは, すべてあなたたちの食糧とするがよい。わたしはこれらすべてのものを, 青草と同じようにあなたたちに与える。ただし, 肉は命である血を含んだまま食べてはならない。」(創9:3～4節)

כָּל־רֶמֶשׂ אֲשֶׁר הוּא־חַי לָכֶם יִהְיֶה לְאֲכִלָּה כִּי־רַק עֹשֶׂב יִנְתִּי לָכֶם אֲחִי־כַל:
אֲדִבְשֶׁר בְּנַפְשׁוֹ רָמוּ לֹא תֹאכְלוּ

²¹ מִאֲכָל を本稿では便宜上「食糧」と訳す。『新共同訳聖書』は「食べるに」(2:9), 「いかにもおいしそうで」(3:6), 「食べられる物」(6:21)と訳している。

9章1節で、神はノアとその息子たちに「産めよ、増えよ、地に満ちよ」と祝福して言われる。それから2節ですべての動物が「あなたたちの手にゆだねられる(=与える)」と言って、食物について言及する。これは1章28～29節とまったく同じ順序である²²。

1章28～29節：祝福して言う+「産めよ、増えよ、地に満ちよ」
+「すべて支配せよ」(支配させよう)+食物(植物)

9章1節：祝福して言う+「産めよ、増えよ、地に満ちよ」
+「あなたたちの手にゆだねられる」+食物(動物)

洪水の後、神が人間に対し食物としてよいというのは、「動いている命あるもの」(=命あるすべての這うもの。3節：פֶּלֶרְקֶשׁ אֲשֶׁר הוּא־חַי)である。用語としては「這うもの」(רֶקֶשׁ)²³という語が使われているが、それは動物を代表しているものと見てよいであろう²⁴。そして、それらが、「あなたたちの食物となる」と言われている。ここでの文言は1章29節と全く同じである。

1章29節：「あなたがたに」+「なる」+「食物と」=לֶחֶם יְהִיָּה לָכֶם

9章3節：「あなたがたに」+「なる」+「食物と」=לֶחֶם יְהִיָּה לָכֶם

このあと、「わたしはこれらすべてのものをあなたがたに青草と同じように(פִּירֶק עֵשֶׂב)与える」と、1章30節と同じ単語「青草」を用いている。しかしながら、この単語は厳密に言えば、1章30節では動物の食物として言われているのであって、人間の食物としてではない。人間にとっての食物は「種を持つ草と種を持つ実をつける木」であり、「青草」とは書かれていない²⁵。天地創造の時、動物は青草を食べると言われたのであ

²² ただし、1章では「支配する」という動詞が使われ、9章では「～をあなたたちの手に与える」と表現されており、動詞は異なっている。

²³ 「這うもの」(רֶקֶשׁ)は旧約聖書中に全部で16回出て来るが、原初史においては9回用いられている。1：24, 25, 26, 6：7, 20, 7：14, 23, 8：19, 9：3。

²⁴ そのため、『新共同訳聖書』は「動いている」と訳し、『口語訳聖書』は「すべて生きて動くもの」と訳す。

²⁵ 「青草」(פִּירֶק עֵשֶׂב)は緑(=青い)の草(עֵשֶׂב)。緑(יֶרֶק)は創1：30, 9：3, 出10：15, 民22：4, 王下19：26, イザヤ15：6, 37：27, 詩37：2に合計8回出て来る。

るが、洪水の後には、その動物(動いている命あるもの)を人間が青草のように食べるというのである。おそらく、そうした脈絡で青草と言われているのであろう。

さらに神は、「このすべてをあなたがたに与える」(נתתי לכם את־כל)と言われる。「あなたがたに」(לכם)は1章29節と同じくここでも2回使われている。動詞「与える」も1章29節と同じく「与える」(נתן)の1人称男性単数形(神)である。

1章29節：「与える」+「あなたがたに」+「すべての～を」 את־כל ~לכם נתתי

9章3節：「与える」+「あなたがたに」+「すべてのものを」 את־כל לכם נתתי

9章3節で神が人間(「あなたがた」)に与えるのは「すべてのものを」(את־כל)である。これは同節前半の「すべての動いている命あるもの」(כל־רמש אשר הוא־חי)を簡略に表現したものと考えられる。他方、1章29節では、第一に「すべての草」、第二に「すべての木」が人間の食物の対象として述べられている。

1章29節：① 「すべての草～を」 את־כל עשב זרע זרע אשר על־פני כל־הארץ

② 「すべての木～を」 ואת־כל־העץ אשר־בו פרי־עץ זרע זרע

9章3節：③ 「すべてのものを」 את־כל (= כל־רמש אשר הוא־חי)

9章3節のこれら「すべてのもの」(=動物)は、「青草と同じように」と1章29節を前提にして述べられている。しかしながら、1章と異なるところは、9章では血の肉の禁止があるということである。「ただし、肉は命である血を含んだまま、あなたがたは食べてはならない」(9章4節, אך־בשר בנפשו רמו לא תאכלו)

この節の最後に「あなたがたは食べてはならない」(לא תאכלו：2人称男性複数形)との禁止の言葉がある。これは創世記3章1節と3節で述べられている木の実を食べることの禁止「あなたたちは食べてはならない」(לא תאכלו：2人称男性複数形)と同じ表現である。ここにおいて次に、創世記2～3章のエデンの園における禁断の木の実の物語(ヤハウィスト)を考察してみよう。

(2) 創世記のヤハウィストにおける「食べること」—— 奨励と禁止 ——

(i) 創世記2章の「食べること」

祭司資料である創世記1章では、人間及び動物の食物について述べられるが、それは前述したように、草と木で代表される植物のことである。ヤハウィストである創世記2章4節後半～3章の中にあるエデンの園の物語においては、園のすべての木から食べなさいと言ったのちすぐに、ただし、善悪の知識の木の実からは食べてはいけないとの禁止の言葉がある。木の実は植物である。ということは、共時的に創世記を読めば、2章4節後半からのヤハウィストは、1章1節～2章4節前半の祭司資料を受け取って物語を展開しているということである。資料を分けての通時的な読み方ではなく、編集されたテキストをそのままに読んでゆくという共時的な読み方からすれば、すでに第1章で草食のことが言われているので、2章4節後半以降はその草食という文脈において物語を続けているということである。

① 創世記2章9節

「主なる神は、見るからに好ましく、食べるに良いものをもたらしあらゆる木を地に生えいさせ、また園の中央には、命の木と善悪の知識の木を生えいさせられた。」

וַיַּצְמַח יְהוָה אֱלֹהִים מִן־הָאָדָמָה כָּל־עֵץ נֹחֵם לְמִרְאָה וְטוֹב לְמַאֲכָל

וְעֵץ הַחַיִּים בְּתוֹךְ הַגֵּן

וְעֵץ הַדַּעַת טוֹב וְרָע:

ヤハウィストにおける食べることについての最初の言及は2章9節にある。この記事は神が人を土から造り、人をエデンの園に置いた話の続きとして書かれている。神は人を造ったのちにあらゆる木を土から生えさせるが、それは食べることと直接に結びついている。祭司資料の第1章では3日目に、草のあとに実をつける木が生えさせられ(11～12節)、6日目に人間が創造されて、草と実をつける木が人間に食物として与えられる(29節)。木を生えさせてから、それが食物として与えられるまでに3日を要するが、これは人間の創造を待ってのことである。それに対し、ヤハウィストの2章では、まず人間が造られ、その後に食べる

に良いものをもたらす木を生え出でさせたと書かれている。ちょうど順序が逆になっていて両資料の相違は明らかである。

1章 29節： וְאַחַד כָּל-הָעֵץ אֲשֶׁר-בוּ פְרִי-עֵץ זָרַע זָרַע

2章 9節： כָּל-עֵץ נִחְמַד לְמַרְאֵה וְטוֹב לְמֵאֲכָל

וְעֵץ הַחַיִּים בְּתוֹךְ הַגֶּן

וְעֵץ הַדַּעַת טוֹב וְרָע:

2章9節前半に記されている木は、第一に「見るからに好ましく」(נִחְמַד לְמַרְאֵה)，第二に「食べるに良い」(וְטוֹב לְמֵאֲכָל)というものである。「見る物」(מַרְאֵה)と「食べる物」(מֵאֲכָל)が対になっているが、「木」(עֵץ)，「好ましく」(נִחְמַד)，「食べるに」(לְמֵאֲכָל)，「よい」(טוֹב)などという単語は3章6節にも使われており，2章9節が3章6節と密接に関係することがわかる。

2章9節：

כָּל-עֵץ נִחְמַד לְמַרְאֵה וְטוֹב לְמֵאֲכָל

3章6節： וְחָרָא הָאִשָּׁה כִּי טוֹב הָעֵץ לְמֵאֲכָל וְכִי תֵאָדָה-הוּא וְכִי תֵאָדָה-הוּא לְעֵינַיִם וְנִחְמַד הָעֵץ לְהַשְׂכִּיל

2章9節の「見るからに好ましく」(נִחְמַד לְמַרְאֵה)は，3章6節の「目を引き付け，賢くなるように唆していた」(וְכִי תֵאָדָה-הוּא לְעֵינַיִם וְנִחְמַד הָעֵץ לְהַשְׂכִּיל)に，2章9節の「食べるに良い」(כָּל-עֵץ~וְטוֹב לְמֵאֲכָל)は，3章6節の「その木はいかにもおいしそうで」(כִּי טוֹב הָעֵץ לְמֵאֲכָל)に対応する。どちらも木に関して「食糧」(מֵאֲכָל)と言われ，よい(טוֹב)と言われている。3章6節ではこれに続いて，女と男が木の実を食べることが書いてあるが，その予兆はすでに2章9節にあったのである。

2章9節後半に書かれている園の中央にある二種の木は，第一が「生命の木」(וְעֵץ הַחַיִּים בְּתוֹךְ הַגֶּן)，第二が「善悪の知識の木」(וְעֵץ הַדַּעַת טוֹב וְרָע)である。見るからに好ましく，食べるに良い木は，園の中央にある生命の木，善悪の知識の木に関係する。

続いて10節から14節にかけて四つの川の話があり，15節でエデンの園に人を住まわせることが言われ，16節～17節で再び木についての叙述がある。詳細に見れば，15節～17節は四つの川の話をはさんで，8節～9節に対応しているということがわかる²⁶。

²⁶ ただし，「見るからに好ましく」は欠落している。

2章 8節：エデンの園に人を置く →すべての木，善悪の知識の木
 2章 15節：エデンの園に人を住まわす→すべての木，善悪の知識の木
 ただ2章 15～17節は，2章 8節～9節に比べて記述にある種の発展がある。15節では神が人をエデンの園に住ませたのは，そこを耕し，守るためであると言われているが，16節では9節の「食べるに良いものをもたらず」木を前提として，食べてよい，食べて悪いということが，神の最初の発言として述べられている。食物に関する神の発言は，祭司資料では6日目の最後（1章 29～30節）であったが，ヤハウィストでは最初（2章 16～17節）に設定されている。16～17節の中で，「食べなさい（＝食べるに食べなさい）」と言ったあとに，「ただし，善悪の知識の木からは，決して食べてはならない。食べると必ず死んでしまう（＝死ぬに死ぬ）」（17節）という禁止の言葉がある。

② 2章 16～17節

「主なる神は人に命じて言われた。『園のすべての木から取って食べなさい。ただし，善悪の知識の木からは，決して食べてはならない。食べると必ず死んでしまう。』」

16節： מכל עץ-הגן אכל האכל לאמר ויצו יהוה אלהים על-האדם

17節： כי ביום אכלך ממנו מות תמות ומעץ הדעת טוב ורע לא תאכל ממנו

2章 16節で，神は人にまず第一に木から食べることを積極的にすすめる。16節文末の「取って²⁷ 食べなさい」（新共同訳）は直訳すれば「食べるに食べなさい」（אכל האכל）で，同じ動詞「食べる」が二回使われている強調形（不定詞＋2人称男性単数形）である。この「食べる」の強調形はここだけにしか使われていないが，17節文末の「必ず死んでしまう」も直訳すれば「死ぬに死ぬ」（מות תמות）で，「食べるに食べよ」と同じく，同じ動詞「死ぬ」を二回使った強調形（不定詞＋2人称男性単数形）である。ここから明らかなことは両者は対立して記述されているということである。「食べる」と「死ぬ」が対立しているということは，「食べる」ことが「生きる」ことに関係するからである。

²⁷ 『新共同訳聖書』等はこのように訳すが，厳密に言えば原文には「取る」という動詞はない。

17 節では 16 節の「食べるに食べなさい」を引き受けながら、ただちに一つの禁止が付け加えられている。それは「善悪の知識の木から」²⁸ は「食べてはいけない」（לֹא תֹאכַל）ということである。16 節は食べることの奨励を記しているが、17 節は食べることの禁止を述べている。こうした禁止は祭司資料（1 章 29 節）にはなかったことである。神はこの同じ禁止の言葉を 3 章 17 節の人（アダム）への断罪の言葉の中で、皮肉を込めて繰り返す²⁹。

17 節後半の文章は直訳すれば、「あなたがそれを（から）食べる日には、あなたは死ぬに死ぬであろう」となり、人が禁止を破ればどうなるかが述べられている。「あなたがそれを（から）食べる日には」は、3 章 4 節で蛇も同じ言い方をする。ただその結果は正反対である。神はそれから食べる時には「死ぬ」と言うのに対し、蛇は「目が開かれる」と言う³⁰。

2 章 17 節： כִּי בַיּוֹם אֲכַלְךָ מִמֶּנּוּ מוֹת תָּמוּת

3 章 4 節： כִּי בַיּוֹם אֲכַלְכֶם מִמֶּנּוּ וְנִפְקְחוּ עֵינֵיכֶם

2 章 16～17 節は神が「人」（アダム）に対して言われたことであるが、この言葉の後、神は「人が独りでいるのは良くない。彼に合う助ける者を造ろう」（18 節）と言って、動物を造った後に女を造られる。それは人のあばら骨を取ってのことであり、それゆえ、男から取られたので女と言われると述べられている（23 節）。ここで、「取る」という動詞が使われているが、2～3 章にかけての物語全体の中で「取る」という動詞は大きな意味を持っており、「食べる」ことに関しても用いられている。そこで次に動詞「取る」について考察してみよう。

²⁸ 16～17 節で前置詞「～から」（מִן）が 2 回、前置詞「～から」（מִן）+ 指示代名詞（הַ）の「それから」（מִמֶּנּוּ）が 2 回使われている。

²⁹ 神が人（アダム）が「女の声に聞き従い」と言う時、それは自分の言ったことに聞き従わなかったということを皮肉的に述べている。

³⁰ 「目が開かれる」はルカ 24：30～31 の「一緒に食事の席に着いたとき、イエスはパンを取り、賛美の祈りを唱え、パンを裂いてお渡しになった。すると、二人の目が開け、」に関係するであろう（διηνοιχθησαν οι οφθαλμοι = 創 3：6 (LXX) διηνοιχθησαν οι οφθαλμοι）。

(ii) 動詞「取る」の用法 (創世2章4節後半～3章24節)

創世記2章4節後半～3章24節で、動詞「取る」(לקח)は全部で8回用いられている。2章で4回、3章で4回である³¹。

2章では、まず第一に神は造った人を「取って」エデンの園に住まわせる(15節)。次に、人のあばら骨の一つを「取り」(21節)、人から「取った」あばら骨で女を造る(22節)。最後に、女(אִשָּׁה)と言われるのは男(אָדָם)から「取られた」(23節、受動形 לָקַח)からであると動詞「取る」を用いて説明している。すべて神が主体で、人間と関係するものである。15節以外はすべて前置詞「～から」(מִן)を伴っている³²。

3章では、2章最後の「女」を引き受け、「女」と深く関係して始まるが、「取る」の用法はここでは二種類である。第一は「取って食べる」ことに関係する「取る」で、①女が木の実から取って食べる(3:6)、②人が命の木から取って食べないように(3:22)という文脈で使われている。第二は「そこから取られた土」に関連する「取る」で、①そこから取られた土に戻る(3:19)、②そこから取られた土を耕す(3:23)という文脈で用いられている。

① 「取って食べる」

(a) 創3:6「女は実を取って食べ、一緒にいた男にも渡した(=与えた)ので、彼も食べた」

וַתֵּחַק מִפְרִיָו וַתֹּאכַל וַתִּתֵּן נִסְלָאִשָּׁה עִמָּהּ וַיֹּאכַל

動詞「取る」(3人称女性単数)の主語は女である。動詞は「取る」→「食べる」→「与える」と続く。「取る」のは「その実を(から)」(מִפְרִיָו)であり、今までの「木から」(מִמֵּץ 2:16～17, 3:1)とは異なる³³。「実を(から)」は3章2節の女の発言から始まっている(3:3, 5, 6)。「女は実を(から)取って食べ、一緒にいた彼女の男(イッシュ)にも与える。ここでは、女と男の並列として男と記され、人(アダム)とは言われてい

³¹ 2:15, 21, 22, 23, 3:6, 19, 22, 23。

³² 2章の動詞「取る」については直接に「食べる」ことと関係しないので、本稿では3章の動詞「取る」についてのみ考察する。

³³ ただし、3:11, 12, 22で人は「木から」と言う。

ない。まず、女が食べ、次に男が食べる。動詞「取る」は他のすべての動詞に先立って最初におかれている。

(b) 創3：22「手を伸ばして命の木からも取って食べ、永遠に生きる者となるおそれがある」

ועָתָה פְּרוּשָׁלַח יָדוֹ וְלָקַח גַּם מִעֵץ הַחַיִּים וְאָכַל וְחַי לְעֹלָם

これはエデンの園から人を追放する前に、神が語った言葉である。行為の主語は「人」であり、動詞は「手を伸ばす」→「取る」→「食べる」→「生きる」と続く。ここでも3章6節と同様に、「取って食べる」と、動詞「取る」に動詞「食べる」が続いている。食べることが永遠に生きることと関連するというのである。これは2章17節で神が言った「食べると必ず死んでしまう」という言葉に対立する³⁴。3章22節では「食べる」ことが「生きること」に直結している。木についても、以前のように「善悪の知識の木」（2章17節）、「園の中央の木」（3章3節）ではなく、「命の木」と書かれている³⁵。食べることが生きることと関連するゆえに、木もまた命の木と言われるようになったのではないかと考えられる。3章6節では「実を（から）取って食べ」であったが、22節では再び「命の木からも取って食べ」という表現に戻っている。前置詞はどちらも「～から」（מִן）である。両者の比較は以下のとおりである。

3章6節：女 וַתִּקַּח מִפְּרִי הַתְּאֵבֶל וַתֹּאכַל וַתֵּן גַּם לְאִישָׁהּ עִמָּהּ וַיֹּאכַל

3章22節：人 וְעָתָה פְּרוּשָׁלַח יָדוֹ וְלָקַח גַּם מִעֵץ הַחַיִּים וְאָכַל וְחַי לְעֹלָם

3章6節：女が取る→食べる→与える：その実から（מִן）男にも（גַּם）

3章22節：人が取る→食べる→生きる：命の木から（מִן）も（גַּם）

② 「そこから取られた土」

(a) 3章19節「なぜならそれから取られたあなたは塵であるので塵に戻る」³⁶

³⁴ 蛇は「（それを食べると～）神のように善悪を知る者」になると言う（3章5節）。

³⁵ 他には3：24。

³⁶ 私訳。

כִּי מִמְּנָה לָקַחְתָּ כִּי־עָפָר אֶחָדָה וְאֶל־עָפָר תָּשׁוּב

神の人に対するこの断罪の言葉の中で、動詞「取る」は「土」と結びつけられて「あなたがそれから取られた」と言われている。「取られた」は「取る」の受動形（2人称男性単数形）。「それから」（מִן + מָה）の「それ」は「土」である。この箇所は2章7節（עָפָר מִן־הָאֲדָמָה）と関連するが、しかしながらそこでは「取る」という動詞ではなく、「造る」（וַיִּצְרָא）という動詞が使われている。

(b) 3章23節「彼に、自分がそこから取られた土を耕せることにされた」

לְעֹבֵד אֶת־הָאֲדָמָה אֲשֶׁר לָקַח מִשָּׁם

3章23節では、神が人をエデンの園から追い出し、人がそこから取られた土を耕すということが言われている。ここでも19節同様、土から取られたことが述べられている。ただ、19節の「そこ(=それ)から」(מִמְּנָה)は前置詞「～から」(מִן) + 指示代名詞「それ」(מָה)であったが、23節の「そこから」(מִשָּׁם)は前置詞「～から」(מִן) + 「そこ」(שָׁם)という単語である。また、19節ではそれから取られた土に「あなたは返る」(תָּשׁוּב)と言われるが、23節ではそこから取られた土を「耕す」(לְעֹבֵד)と述べられている。

3章19節：それから(מִן + מָה) + 「取る」の受動形(2人称男性単数形) + 土に「返る」(תָּשׁוּב)

3章23節：そこから(מִן + שָׁם) + 「取る」の受動形(3人称男性単数形) + 土を「耕す」(לְעֹבֵד)

動詞「取る」の受動形は2章23節にもあるが、そこでは男から「取られた」(3人称女性単数)女のことを言われている。

「取る」の受動形(2～3章) $\left\{ \begin{array}{l} 2章 \quad 23節 = \text{男から} \quad \rightarrow \text{女} \\ 3章 19, 22節 = \text{土(代名詞)から} \rightarrow \text{人} \end{array} \right.$

2章22節では「人から取ったあばら骨で女を造り」と動詞「取る」の能動形が使われ——21節は「そのあばら骨のひとつを(=から)取り」——、動詞「取る」は、土→人→女の関連で用いられているのがわかる。

(iii) 動詞「食べる」の用法(創世記3章)

動詞「取る」と「食べる」は、すでに見たように3章6節と22節で「取って食べる」と結合して用いられている。ここにおいて次に創世記3章における動詞「食べる」(אָכַל)の用法を調べてみよう。創世記3章で、動詞「食べる」は合計17回用いられている。

- ① 1 節〔蛇→女〕「園のどの木からも食べてはいけない、などと神は言われたのか」

לא תאכלו מכל עץ הגן

「園のどの木からも」(מכל עץ-הגן) という表現は、2 章 16 節で言われている神の言葉と同じであるが、「食べてはいけない」(לא תאכלו) という禁止は、2 章 17 節の神の言葉では人に対する言葉として、2 人称男性単数形 (לא תאכל) である。2 章 17 節では人が対象であったが、3 章 1 節の蛇による神の言葉の引用では、2 人称男性複数形となって人と女が対象となっている。3 章 1 節を 2 章 16~17 節に比較すれば、蛇は、神の言葉の 16 節後半 α (園のどの木からも) と 17 節前半 β (食べてはいけない) を結合し、16 節後半 β (食べるに食べなさい) と 17 節前半 α (善悪の知識の木から) を都合のよいように省略しているのである。

2 章 16 節 神→人 (A) 園のどの木からも (B) 食べなさい
 2 章 17 節 (A') 善悪の知識の木からは (B') 食べてはいけない
 3 章 1 節 蛇→女 (A) 園のどの木からも (B') 食べてはいけない

- ② 2 節〔女→蛇〕「わたしたちは園の木の果実を食べてもよいのです」

מפרי עץ-הגן נאכל

ここで、女は「園の木の実を(から)」は「わたしたちは食べる」(נאכל) と言う。これは 2 章 16 節の神の言葉を受けているが、ただ、「園のすべての木から」(מכל עץ-הגן) が「園の木の実を(から)」(מפרי עץ-הגן) に変わっている。3 章では木の「実」が問題となるからである。また、2 章 16 節では「食べるに食べなさい」(אכל תאכל) と動詞「食べる」を二回使った 2 人称男性単数の強調形であったが、ここでは、「わたしたちは食べる」(נאכל) と 1 人称複数形で述べられているにとどまっている。

- ③ 3 節〔女→蛇〕「園の中央に生えている木の果実だけは、食べてはいけない、触れてもいけない、死んではいけないから、と神様はおっしゃいました。」

ומפרי העץ אשר בתוך-הגן אמר אלהים לא תאכלו ממנו ולא תגעו בו פן-תמתו

3 節は 2 節の女の言葉の続きであるが、2~3 節の女の発言は 2 章 16~17 節の神の言葉に類似する。どちらも最初に食べてよいことを述

べ、次に食べてはいけない木（木の实）について語るからである。ただ、食べてはいけない木に関して、2章17節は「善悪の知識の木から」（וּמֵעֵץ הַדַּעַת טוֹב וְרָע）と言うのに対し、3章3節は「園の中央にある木の实から」（וּמִפְּרֵי הָעֵץ אֲשֶׁר בְּתוֹךְ הַגָּן）と述べる。同節の「それから食べてはいけない」（לֹא תֹאכְלוּ מִמֶּנּוּ）は2章17節とほぼ同じであるが、ただ、2人称男性単数形（2：17）が2人章男性複数形（3：3）に変わっている（לֹא תֹאכְלוּ מִמֶּנּוּ）。さらに3章3節では「触れてもいけない」（וְלֹא תִגְעוּ בוֹ）との禁止が付け加えられ、それは「死んではいけないから（＝死なないように）」（פְּנֵי תָמוּתוֹן）という理由からである。この「死なないように」に対応する2章17節では「（食べると）必ず死んでしまう（死ぬに死ぬ）」（מוֹת תָּמוּת）と強調形で書かれている。

2章16節：A 「園のすべての木から」	מִכָּל עֵץ הַגָּן
→B 「食べるに食べなさい」	אֲכַל תֹּאכַל
2章17節：A' 「善悪の知識の木」	וּמֵעֵץ הַדַּעַת טוֹב וְרָע
B' 「それから食べてはいけない」	לֹא תֹאכְלוּ מִמֶּנּוּ
C 「必ず死んでしまう」	מוֹת תָּמוּת
3章2節：A 「園の木の实から」	מִפְּרֵי עֵץ הַגָּן
→B 「わたしたちは食べる」	נֹאכַל
3章3節：A 「園の中央にある木の实」	וּמִפְּרֵי הָעֵץ אֲשֶׁר בְּתוֹךְ הַגָּן
B' 「それから食べてはいけない」	לֹא תֹאכְלוּ מִמֶּנּוּ
C' 「死なないように」	פְּנֵי תָמוּתוֹן

④ 4節〔蛇→女〕「決して死ぬことはない」

לֹא-מוֹת תָּמוּתוֹן

蛇は女の答えに対し、いやそんなことはない、「決して死ぬことはない」（＝死ぬに死ぬことはない）と言う。これは動詞「死ぬ」を2回使った強調（不定詞＋2人称男性複数形）の否定形であり、2章17節の神の言葉「必ず死んでしまう（＝死ぬに死ぬ）」（מוֹת תָּמוּת）に対立している。

⑤ 5節〔蛇→女〕「それを食べると、目が開け、神のように善悪を知るものとなることを神はご存じなのだ。」

כִּי יֵדַע אֱלֹהִים כִּי בְיוֹם אֲכַלְכֶם מִמֶּנּוּ וְנִפְקַחוּ עֵינֵיכֶם וְהָיִיתֶם כְּאֱלֹהִים יֹדְעֵי טוֹב וְרָע

「それを食べると」(כִּי בַיּוֹם אֲכַלְכֶם מִמֶּנּוּ) は直訳すれば、「それからあなたがたが食べる日には」であり、この文章は2章17節の「それからあなたが食べる日には」(כִּי בַיּוֹם אֲכַלְךָ מִמֶּנּוּ) と、単数(あなた)が複数(あなたがた)に変わっているだけであとは同じである。女を含むからである。食べるとその結果どうなるのかと言えば、神は「必ず死んでしまう」(2章17節)と述べるのに対し、蛇は「目が開け、神のように善悪を知るものとなる」(3章5節)と言う。「善悪を知るものとなる」は2章17節の「善悪の知識の木」と関連するであろう。神が禁止された善悪の知識(הַדַּעַת)の木から(それから)食べれば、神のように善悪を知る(יָדְעִי)者となると言うのである。

2章17節	神：A 「善悪の知識の木から」	וּמֵעַץ הַדַּעַת טוֹב וְרָע
	B 「それから食べると」	כִּי בַיּוֹם אֲכַלְךָ מִמֶּנּוּ
	C 「必ず死んでしまう」	מוֹת תָּמוּת
3章5節	蛇：B' 「それから食べると」	כִּי בַיּוֹם אֲכַלְכֶם מִמֶּנּוּ
	C' 「目が開ける」	וְנִפְקְחוּ עֵינֵיכֶם
	A' 「善悪を知るものとなる」	וְהָיִיתֶם כְּאֱלֹהִים יָדְעֵי טוֹב וְרָע

⑥ 6節[女]「女が見ると、その木はいかにもおいしそうで、目を引き付け、賢くなるように唆していた。女は実を取って食べ、一緒にいた男にも渡した(与えた)ので、彼も食べた」

וַתֵּרָא הָאִשָּׁה כִּי טוֹב הָעֵץ לְמֵאֲכָל וְכִי טָאוּהָ הוּא לְעֵינַיִם וְנִחְמַד הָעֵץ לְהִשְׁכִּיל וַתִּקַּח מִפְרִיָו וַתֹּאכַל וַתִּתֵּן גַּם-לְאִישָׁהּ עִמָּהּ וַיֹּאכַל

ここでは蛇と女との会話の後の女の行為が記されている。当節後半については動詞「取る」との関係で述べたので、ここでは当節前半について考察する。「女が見ると、その木はいかにもおいしそうで」(וַתֵּרָא הָאִשָּׁה) (כִּי טוֹב הָעֵץ לְמֵאֲכָל) は直訳すれば、「女は見て良しとした。その木を食物として」となり、最初のヘブライ語4語は創世記1章の「神は見て良しとされた」(וַיֵּרָא אֱלֹהִים~כִּי-טוֹב) にアイロニカルに呼応しているのがわかる。その木は、(a)「食物のために良い(もの)」(כִּי טוֹב הָעֵץ לְמֵאֲכָל)、(b)「目のために望ましいもの、(c)賢くなるために願わしいもの(ニツファル分詞)」(וְנִחְמַד הָעֵץ לְהִשְׁכִּיל)と言われ、人間の三つの欲望の対象として記されている。3章6節のこの記事は、木についての最初の言及箇

所である2章9節に対応しているが、ここではさらにもう一つ「賢くなるため」が付加されている。

2章9節 (b) קָל־עֵץ נִחְמַד לְמִרְאָה (a) וְטוֹב לְמֵאֲכָל

3章6節 (a) כִּי טוֹב הָעֵץ לְמֵאֲכָל (b) וְכִי חָאָה־הוּא לְעֵינַיִם (c) וְנִחְמַד הָעֵץ לְהַשְׂכִּיל

女はその木をこのように見てから取って食べる。木はまず第一に「食物のために良い(もの)」としてあったからである。女は見て、取り、食べ、男に与え、男もまた食べる。

⑦ 11節〔神→人〕「取って食べるなど命じた木から食べたのか。」

הַמִּן־הָעֵץ אֲשֶׁר צִוִּיתִךָ לְבַלְתִּי אֲכָל־מִמֶּנּוּ אֲכָלָהּ

神が人に「どこにいるのか」と問いかけると、人は「裸であるので隠れています」と答える。そこで神は「取って食べるなど命じた木から食べたのか」と言う。2章17節の神の言葉、「ただし、善悪の知識の木からは、決して食べてはならない。食べると必ず死んでしまう」をふまえてのことである。

	命じる	食べてはいけない	木から	食べる
2章17節	(וַיִּצַו יְהוָה אֱלֹהִים)	(לֹא תֹאכַל־מִמֶּנּוּ)	(וּמֵעֵץ)	(אֲכָלָהּ)
3章11節	(אֲשֶׁר צִוִּיתִךָ)	(לְבַלְתִּי אֲכָל־מִמֶּנּוּ)	(הַמִּן־הָעֵץ)	(אֲכָלָהּ)

この2箇所は、(a)「木から」という点に関しては同じであるが、3章11節では疑問代名詞が付いて疑問形となっている。(b)「私が命じた」(3:11)は「主なる神は命じられた」(2:17)に対応する。(c)「(それから)食べてはいけない」は2章17節では否定詞(לֹא)＋「食べる」の2人称男性単数形(תֹּאכַל)であるのに対し、3章11節は否定詞(לְבַלְתִּי)＋「食べる」の不定詞(אֲכָל)である。(d)「それから」はどちらも同じく、前置詞「～から」(מִן)＋3人称代名詞語尾(וֹ)が付いている形である。(e)3章11節の「あなたは食べたのか」は2人称男性単数形であるのに対し、2章17節は「あなたが食べる日」と動詞「食べる」の不定詞に2人称男性代名詞語尾が付いている形である。

- ⑧ 12 節〔人→神〕「あなたがわたしと共にいるようにして下さった女が、木から取って与えたので、食べました。」

הַאִשָּׁה אָשֶׁר נָתְתָה עִמָּדִי הִיא נְתַנָּה־לִי מִן־הָעֵץ וְאָכַל

神からの問いかけに、人は二重の意味で自分には責任がないと答える。それは「与える」という動詞を使っていることである。神が私と一緒にいるようにと「与えた」その女が、「木から」私に「与えた」ので私は食べましたと、第一に神がわたしに（女を）与え、次に女がわたしに（木から）与えたと説明する。あたかも自分には責任がないとでもいう言い方である。最後に人は「私は食べました」（1人称単数）と隠すかのように自分が食べたことを述べる。

- ⑨ 13 節〔女→神〕「蛇がだましたので、食べてしまいました」

הַנָּחָשׁ הַשִּׂיָּאֵנִי וְאָכַל

前節での人の返答を聞いて、次に神は女に何ということをしたのかと問いかける³⁷。そうすると、女はまず第一に蛇のせいですよと蛇を最初に言う。これは12節で人が神に対して女のせいですよと女を最初に言うのと同じである。蛇がだましたので「私は食べました」（1人称単数）と、自分が食べたことを最後に述べるのも12節の人と同じである。ただ、12節で言われている「木から」という言葉はない。

- ⑩ 14 節〔神→蛇〕「お前は、生涯はいまわり、塵を食らう」

וְעָפָר תֹּאכַל כָּל־יְמֵי חַיֶּיךָ

神は人と女に対してはある種の尋問をするが、蛇に対しては何も聞かず、蛇からはじめて、女、人の順に断罪の言葉を述べてゆく。14節の最後に神は蛇に塵を食べることが言われる。2章7節によれば、その塵でもって人は造られたのである。「食べる」の2人称男性単数形は3章17節の人の箇所でも使われているが、そこではwayyiqtolの形で「食べた」という過去の意味を持っている。14節では未完了の形で「食べるだろう」というこれからの未来の意味を持ち、人と蛇の「食べる」には相違点がある。

³⁷ 神の問いかけは常に疑問詞ではじまる。「どこ」（9節）、「だれ」（11節）、「なに」（13節）。

ある。

⑪ 17～19 節〔神→人〕

17 節「お前は女の声に従い、取って食べるなど命じた木から食べた。

וְתֹאכַל מִן־הָעֵץ אֲשֶׁר צִוִּיתִיךָ לֵאמֹר לֹא תֹאכַל מִמֶּנּוּ אֲרוּרָה הָאֲדָמָה בְּעֵבוּרֶךָ

お前は、生涯食べ物を得ようと苦しむ。」

בְּעֵצְבוֹן תֹּאכְלֶנָּה כָּל יְמֵי חַיֶּיךָ

18 節「野の草を食べようとするお前に。」

וְקוֹץ וְדִרְבַּר תִּצְמִיחַ לְךָ וְאָכַלְתָּ אֶת־עֵשֶׂב הַשָּׂדֶה

19 節「お前は顔に汗を流してパンを得る(=食べる)」

בְּזַעַת אַפֶּיךָ תֹאכַל לֶחֶם עַד שׁוֹבֶבְךָ אֶל־הָאֲדָמָה כִּי מִמֶּנָּה לֶקְחָתָּ

神の女に対する断罪の言葉の中には「食べる」という動詞はない。あるのは蛇と人に対する言葉の中においてだけである。神の三者に対する断罪の言葉の中で、動詞「食べる」が一番多いのは人に対してである。神は人に対しあなたは女の声に聞き従い、「あなたは食べた」(17 節)と言われる。神の言葉の中で動詞「食べる」は、人や女が発言の最後に「私は食べた」と言うのとは異なり、最初の方で「あなたは食べた」と強調されている。人が食べたのは「私がそれから食べるなど命じた木から」である。これは 3 章 11 節、さかのぼっては 2 章 17 節と関係する箇所である³⁸。

2 章 17 節 וּמֵעֵץ הַדְּעִת טוֹב וְרָע לֹא תֹאכַל מִמֶּנּוּ

3 章 11 節 הַמִּן־הָעֵץ אֲשֶׁר צִוִּיתִיךָ לְבַלְתִּי אֶכֶל־מִמֶּנּוּ אֶכְלֶתָּ:

3 章 17 節 וְתֹאכַל מִן־הָעֵץ אֲשֶׁר צִוִּיתִיךָ לֵאמֹר לֹא תֹאכַל מִמֶּנּוּ

3 章 17 節の「それ (=木) から食べるな」(לֹא תֹאכַל מִמֶּנּוּ) は 2 章 17 節と同文であるが、それ以外では 3 章 17 節はどちらかといえば 3 章 11 節の文章に近い。それは 11 節も 17 節も神の人に対する言葉だからであろう。「私がおあなたに命じた木から」(3:17) は 3 章 11 節とほぼ同じであ

³⁸

	命じる	食べてはいけない	木から	食べる
2 章 17 節	(וַיִּצַו יְהוָה אֱלֹהִים)	(לֹא תֹאכַל־מִמֶּנּוּ)	(וּמֵעֵץ)	(אֶכְלֶדָּ)
3 章 11 節	(אֲשֶׁר צִוִּיתִיךָ)	(לְבַלְתִּי אֶכֶל־מִמֶּנּוּ)	(הַמִּן־הָעֵץ)	(אֶכְלֶתָּ)
3 章 17 節	(אֲשֶׁר צִוִּיתִיךָ לֵאמֹר)	(לֹא תֹאכַל מִמֶּנּוּ)	(מִן־הָעֵץ)	(וְתֹאכַל)

り³⁹、「あなたは食べた」(3：17) は2章17節が完了形、3章17節が wayyiqtol であって両者ともに食べたと言う過去の意味をあらわしている。

禁じられた木から食べたその結果、土は呪われるものとなって、人は食物を得るために苦勞するということが述べられる。「あなたは生涯苦しんで食べる」(17節)と言われ、この「苦しんで食べる」は16節の女に対する神の言葉、「あなたのはらみの苦しみを大いに増す。苦しみのうちにはあなたは子供を産む」に対応する。女には妊娠、出産の苦しみ、人には食べることの苦しみが言明されている。「あなたは生涯～」(17節)は14節で神が蛇に対して語る言葉と同じである。蛇に対しては、「あなたは塵を食べる」(14節)と述べ、人に対しては、「あなたは野の草を食べる」(18節)と言う。草に関しては、すでに祭司資料の1章29節でそれを食物とすることが述べられているが、ここでは「野の草」と限定されている。野の草に関しては、神が地と天を造ったとき(2章4節b, ヤハウィスト), 「地上にはまだ野の木も、野の草も生えていなかった」(2：5)と述べられている。木に関しては2章9節でそれを生えさせたと書かれているが、草に関しては何も述べられていない。3章18節で突然に野の草を人は食べると言われるのは、3章1節から13節にかけての「木から食べる」こととの関連で、禁じられた木の実を食べたその結果、連動的に「野の草を食べる」ことに言及されているのであろう。木と草は祭司資料(P)でも(1：11～12, 29) ヤハウィスト(J)でも(2：5, 17～18)一対のものとして登場する。どちらの資料でもそれらは食べることと関連して言われている。

P：草+木の発言→草+木の創造→草+木を食べる

J：木+草の不在→木の創造→木から食べる+草を食べる

3章19節では顔に汗して、あなたはパンを食べると言われ、苦勞して日々の食糧を得ることが述べられている。顔と訳されている単語は原文では鼻であり、鼻は2章7節で命の息を吹き込まれた身体器官として登場しており、人は肝心要のところで苦勞するということが暗示されている。蛇から始まった神の断罪は人で終わるが、蛇に対しては塵を食べる

³⁹ 3章17節には אָמַן が付加されているという違いがあるだけである。

ことが言われ、人に対しては野の草を食べること、苦勞してパンを食べることが述べられ、最後に人は塵であり、塵に返ると締めくくられている。神の断罪の言葉は、蛇の〈塵—食べる〉(3:14)で始まり、人の〈食べる—塵〉(3:18~19)で終わるというキアスムス(交差法)で枠組みが形成されている。

IV. エピローグ

祭司資料によれば、人間に最初に食べることが許されたのは草と木(の実)であった。そこには何らの禁止もない。他方、ヤハウィストには、木の実を食べてはいいが、園の中央にある木からは食べてはいけないとの禁止がある。だが、女は蛇の誘惑により、木から取って食べ、共にいた男にも与えたので男も食べる。その結果、人は苦しんで食べる、野の草を食べることになる。木の実を食べたために野の草を食べるはめになる⁴⁰。ここでも草と木が一对になっているが、これは草食である。祭司資料では肉食に関して、ノアの洪水以後それが許される。洪水の後、神は青草と同様に、肉を食べてよいと言われる。ただし、血はいけないと禁止される。ヤハウィストでは、園のどの木からも食べてよいが、園の中央にある木からは食べてはいけないと禁止される。これは草食に関しての禁止である。祭司資料では、1章で草や木から食べることが述べられ、そこに禁止はないが、9章で肉を食べることが言われながらも、その後すぐに血を食べてはいけないとの禁止がある。これは肉食に関する禁止である。このように両者を比較すれば、ヤハウィストは草食における場合の禁止、祭司資料は肉食における場合の禁止を設定しているということがわかる。

主の晩餐においては、パンとぶどう酒が一对のものとして登場する。パンは麦から、ぶどう酒はぶどうの木⁴¹から造られる。創世記同様に、草と木がセットとなっていると言える。どちらも砕かれて造られるもので

⁴⁰ 祭司資料では草—木(1:29)の順であるが、ヤハウィストでは木—草(2:5)の順である。

⁴¹ マタイ 26:29, マルコ 14:25, ルカ 22:18 参照。

ある。食べることと飲むことが一対となっており、これは飲食をあらわす。創世記1章～9章17節には飲むことは出てこないが、9章の終り(18～28節)にノアがぶどうを栽培し、ぶどう酒を飲んで酔うという話があり、これが聖書の中での飲むことの最初である。麦とぶどうの木は植物であるが、両者ともに、砕かれて変化してパンとなり、ぶどう酒となる。固体と液体である。最後の晩餐の席においてイエスは、パンは私の体であり、ぶどう酒は私の血であると言う。これは植物から動物の血肉への変化、移行であり、創世記の祭司資料が食べることにに関して、植物から動物へと発展するのに相応するであろう。

女と男が禁じられた木の実を取って食べた結果、人間には食べること、産むことの苦痛が入ってきた。他方、第二のアダム、イエスは草木という植物の結実であるパンとぶどう酒を取って食べなさい、飲みなさいと言う。その血は人間の罪が赦されるためのものである(マタイ26:28)。ここではエデンの園で犯された罪に対しての赦しも含まれていると考えられる。創世記9章4節では禁じられていた血を飲むことが、主の晩餐ではすすめられるのである。ヨハネは6章53～54節で次のように記す。「人の子の肉を食べ、その血を飲まなければ、あなたたちの内に命はない。わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、永遠の命を得、わたしはその人を終わりの日に復活させる。わたしの肉はまことの食べ物、わたしの血はまことの飲み物だからである」イエスが食べなさい、飲みなさいと言うのは、永遠の生命を得るためである⁴²。

神から鼻に命の息を吹き込まれて生きるようになった人は(2:7)、禁じられた木の実を取って食べた結果、顔(鼻)に汗してパンを得なければならなくなった(3:19)。それに対し、イエスはパンを取って食べなさい、杯を取って飲みなさいと言う。エデンの園で禁じられたのは木の実であり、ノアの洪水の後に禁じられたのは血であるが⁴³、イエスは木の実から作られるぶどう酒を飲みなさい、これはわたしの血であると言う。旧約の禁止は新約において逆転する。主の晩餐は基本的には旧約の過越祭の食事であるが、その記述の背景には創世記1～9章の食べることと

⁴² 創世記3章22節に対立する記述である。

⁴³ イエスの血は創9:5の血の賠償と関係するであろう。

食べることの禁止，それが破られる記事が潜んでいる。パン＝肉を食べ、ぶどう酒＝血を飲むことによって、それらは食べる人の肉となり、飲む人の血となって人は生きる。主の晩餐は、イエスの犠牲を自己の血肉とする食事、罪の赦しに感謝する食事 (*εὐχαριστία*) である。エウカリスティア (*εὐχαριστία*) は、食べること、飲むことによって在りし日のイエスを思いおこし、イエスを今という現在に在らしめる会食である。